

北タイの仏教説話

——タイ国所伝 *pañāsāyātaka* 調査報告  
並びに関連する仏教説話紹介——

清水洋平・村西弘行

*pañāsāyātaka* (五〇のジャータカ) は、東南アジア諸地域、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアなどに流布する仏教説話の集成である。説話がジャータカ形式(現在物語・過去物語・人物の結合)を厳格に踏襲していることから、疑経ジャータカ(Apocryphal Jataka)と呼ばれることもある。それらは、南座上座仏教に伝承された五四七話からなる所謂「五〇〇ジャータカ」とはまったく異なり、また、北方に伝承され発展してきた「本生経類」とも異なるものである。このパリー語で書かれた *pañāsāyātaka* は、ビルマ文字、クメール文字、タム・ランナー文字、モン文字などの東南アジア各地の文字で貝葉に刻まれ、各地の寺院で保存され伝承されてきた。

一方、タイ王室から贈られたとされる南方仏教貝葉写本の大コレクション(大谷貝葉)が、大谷大学図書館に存在する。③その中の一つに *pañāsāyātaka* が含まれていたことから、本学での *pañāsāyātaka* 研究の端緒が開かれたと言ったことが出来る。④

これまで、*pañāsāyātaka* の現地調査は通算三回となるが、今回の調査日程は以下の通りであった。

◎二〇〇四年八月三〇日～九月五日 バンコクにおける各専門家との討議、現地調査。

◎九月六日～八日 チェンマイにおける各専門家との討議、現地調査。

(調査メンバーは、東方研究会研究員 田辺和子、大谷大学任期制助手 清水洋平、大谷大学博士後期課程 村西弘行の三名である。)

○八月三十一日：バンコク・Wat Chetupon (通称 Wat Pho) 寺院・Phra Maha Thab Mai (Phra Suthihammannuwat) 長老と以下の事項について懇談した。

1. 長老より、Wat Pho 寺院所蔵のタイ王室版 *pañāsāyātaka* 貝葉写本と大谷版貝葉写本との相互比較における読解協力の申し出と、将来における校訂出版の勸奨を受けた。

2. 第一回目調査の折、Phra Maha Thab Mai 氏のご好意により、未整理のままの膨大な量の貝葉写本を保持している Wat Rachasitharam 寺院の *pañāsāyātaka* 貝葉写本も併せ調査・撮影を行った。今回、その折に収集した同寺院が所蔵する *pañāsāyātaka* 貝葉写本の取り扱いについて質疑を受け、資料的価値を検討中の旨を回答した。

○九月一日～三日：The Siam Society ⑦ 第一回目調査から引き続き(助力頂いているフランス極東学院 (EHEC) 研究員の Jacqueline Filliozat 女史から、我々が今までに行った校訂作業

の問題点に示唆をいただき、更に今後の校訂作業のあり方についても教示を受けた。その他、EFEOの *panñasaññatāka* に対する研究の蓄積やEFEO所蔵の *panñasaññatāka* 貝葉写本目録データの活用も討議した。(また、一日は国立図書館、二日はトンブリー地区にある Wat Hong Rattanaram 寺院をそれぞれ訪れた。国立図書館では田辺氏招来の *panñasaññatāka* 貝葉写本マイクロフィルム照合番号の確認作業を、Wat Hong Rattanaram 寺院では第二回調査時 F. Ilhizat 女史と共同作成した同寺院所蔵の貝葉写本目録を僧院長に贈呈した。)

○九月四日：バンコク：貝葉写本研究家 Dr. Peter Skilling と面会。過般<sup>⑤</sup>出版された *panñasaññatāka kept in the Omani University Library* の transliteration 以降の研究の動向などについて質問があり、和訳の計画があることを告げた。

○九月五日：チェンマイへ移動。

○九月六日：チェンマイ・EFEO Chiang Mai Centre：所長 Dr. Louis Gabaude 並びに北部タイ地域の写本研究家 Dr. Anatole-Roger Peltier に面会。北タイ地域に伝承される *panñasaññatāka* について、現在の状況も含め、意見を伺った(詳細後述)。午後、チェンマイ大学タイ学部タイ文学専攻の Udom Roongrungrangsrri (Dr.) 教授に面会の機会を得て、タイ文学の観点から見た *panñasaññatāka* に関する地域性について意見を伺うことが出来た。

○九月七日：Gabaude 氏のご案内により、終日ランブーン地域の寺院調査に従事した。

以上の日程に従い、各専門家から *panñasaññatāka* 研究に関して種々の意見を聴取し得たこと、併せて現地に出向けたことから、関連ある国内では得難い研究文献や原典写真資料などを手にすることが出来た。特に、前述の Anatole-Roger Peltier 氏と面識を得たことは貴重であったように思える。本報告では、そのことについて詳述したい。

Peltier 氏は、著書の略歴欄が語るところによれば、ラオスの吟遊詩人たちの中で育ち、パリ・ソルボンヌ大学で極東学博士号 (Docteur en Etudes Extrême-Orientales) および人文科学国  
家博士号 (Docteur d'Etat ès Lettres et Sciences Humaines) を受けた後、タイ言語および文化を研究分野とし、現在はフランス極東学院チェンマイ支部の研究メンバーとして、北タイ地域に居住するタイ族 (Shan, Koen, Yuan, Lue など) の古典文学を(保存という観点も含めて)研究している。同地域は一四世紀から一六世紀にかけて独自の物語文学が花開いた歴史を有しており、その成果を、それら民族文学を現地語・中央タイ語・フランス語・英語を併記した編纂を行い、公刊して広く世界に開示されることに努めておられる。

ここでは、同氏より寄贈を受けた編著書を中心に、その概要を紹介する。

#### 【被寄贈図書】

1987 : *Tai Kheuan Literature* Editions Duang Kamol, Bangkok.  
kok.

1991: *Pahamamulamali* Suriwong Book Centre Limited, Chiang Mai.

1993: *Sujavajya* (Publié à l'occasion de l'offrande du Cullakathina Monastère du Wat Tha Kradas 14 novembre 1993) First Edition 2000, Ming Muang Publisher, Chiang Mai.

1999: *The White Nightjar* (Lao Tale) Mingmuang Nawarat Printing, Chiang Mai.

○ *Tai Kheoun Literature* (1987) は、同氏が一九八二年から一九八五年にかけてビルマ・シヤン州 Kheoun country の僧院を中心に収集した貝葉ないしは折れ本写本、数にしておよそ二二〇部、二七一文献のカタログである。先に述べたように四つの言語で短い内容解説が付されている。暫定的な分類として、文献には民話 ジャータカ (folk jataka) 、仏教教義 (Buddhist doctrine) 、仏伝 (life of the Buddha) などの粗い種別が施されている。

序文で同氏は、Kheon の文学は、今まであまり紹介されることがなかったのであるが、Yuan (Lan Na) の文学とは同根であり、加えて、Yuan 文学の伝承がビルマやアユタヤとの戦いの中で壊滅的な打撃を受ける一方で、Kheon のそれは、いさゝかその難を逃れていることから比較的保存状態が良く、Yuan ではその文献の由来が不明のものも、更に調査が進めば同定しうるものもあり得ると、その期待を述べている。その意味では、

同氏が現在所蔵しているこの一大収集は今後の北タイ文学の研究にとって無視し得ないものであろう。ただ原本は現地文字による Vernacular であるため、その各々へのアクセスは容易でなく。

○ *Pahamamulamali* (1991) は、Yuan に広く膾炙している世界創造神話である。ただ、民族に深く根ざした口承神話と、およそ二三世紀から一四世紀にかけて入ってきたであろう書写経典を読むことから得られる仏教教理、その両者が人々のイメージネーションの中で新たに融合した結果、実に不思議な物語に変身していることに特徴がある。もちろん、仏教の教義には原則として、宇宙生成論は存在しない。その意味では、民族アイデンティティーの象徴ともいえる民族固有の神話に、異文化である仏教の教えがどのように受容されてゆくかを知る上で、編著者が原文のランナー語をまず中央タイ文字に忠実に変換し、タイ国の人々が近縁語として読みうる形にしたうえ、加えて外国人のために、仏訳・英訳を添えた本書は貴重である。物語全体は三章に分かれており、第一章は、Anhata K'ondanna に仏陀がこの *Pahamamulamali* [起源の物語] の教説を語るところから始まり、*Nang Ithang Gaiya Sangkasi* と *Pu Sangaiya Sangkasi* と呼ばれる女性と男性の存在 [Being] が世界を創ったことを述べ、大地や生き物や人間がどのようにして生じたかを説き、また黄道の十二星宿や十二支がどのように出来たかを語り、民族固有の神話物語が色濃く残る部分である。第二章は、生まれた

人間がその後どのようにして少しずつ物事を知り分けて行ったかを述べ、無数の阿僧祇劫を経巡つて後、ようやく善悪・苦楽の別、世の無常などを学ぶ姿が描かれ、仏教色が加わってくる。第三章は、ある男の何阿僧祇にも渡る輪廻転生を描き、彼が徐々に世俗からの出離へと進む過程が仏教の教理を織り交ぜて説かれ、ついに悟りに到るまでが語られる。おそらく僧であつたらうと思われる原作者は、このようにして民族が伝える世界創造の神話と「苦の滅」という仏教教理の二つの考えを見事に融合し、万物の起源に関する全く新しい物語を著わすことに成功したのである。

○ *Sujavanña* (1993) は、ビルマ・シャン州 Chiang Tung にある Wat Hmong Khan の僧院長 Svāmi Hla 長老から、Pellier 氏が一九九二年に譲り受けた写本に基づき編纂されたもので、同氏の編集の定番となつた、原本の現地語版、中央タイ文字版、仏語抄訳、英語抄訳から構成されており、北タイの諸民族間に共通に伝承する典型的なタイ族の「疑経」ジャータカである。長短 *xyxymx* の版があり、I Phak から II Phak までのものがある。本編は 7 Phak (書写 1990 年) のものを編集している。特に、Svāmi Hla 長老は、Khoen のあまたある民話ジャータカの中で、*Sujavanña* は重要な位置を占めていることから、その出版を強く希望され、原本提供の親切を施していただいたと Pellier 氏は付記している。また、異本として、Chiang Mai の Wat Tha Krads の僧院長 Ananda Aditradhammo 長老が Chiang Tung

から将来した貝葉写本(書写 1950 年)や、チェンマイ大学の社会研究所 (Social Research Institute) 所蔵のマイクロフィルム収集には、Yuan 文字による Wat Indra (Chiang Rai) の写本(書写 1843 年)と Wat Mae Kah (Mae Teng) の写本(書写 1862 年)があり、Lue 文字による *Sujavanñaketa* と題される Luang Prabang 由来の写本も同氏の手許に保持されており、後々の研究者に公開することを表明しておられる。

ジャータカの内容は、英語抄訳にしたがえば、王子として生まれた *Sujavanña* は布施を常に心がける人物である。一方、Himavant の森に住む牛の王 Uṣyabharaja の食べ落としたパイナップルの実を、偶然に口に入れた篤信の女 Nang Khemavati は懐妊して、父のない娘 Ummadanti を産む。父親の居る娘たちから散々蔑まれた Ummadanti は森へ父を探しに出かける。ついに牛王の父に会い、森の宮殿に一緒に住むこととなる。ときに、王子が森に狩に出かけて彼女に遭遇し、そのまま相思相愛の夫婦となって牛王の宮殿で暮らすこととなる。時が経て、王子は自分が布施を出来ないことを悔やみ、牛王の許しを得て娘を連れて都に帰る。都の人々は大歓迎し、王は王子に王位を譲る。新王は都に布施所を作り、布施に精を出す。Sujavanña は、世の中に永続するものは無く、人は遅かれ早かれ死に赴くことに思いがつのり、自らの肉体を布施しても悟りに至りたいと望む。帝釈は年老いた婆羅門に変身し、彼に肉を乞い、またときに夜叉に変じて彼に眼を求め、布施をなす都度、Sujavanña に智慧が生じ、帝釈は早晚彼の望みは叶うであろう

と述べる。彼は世の無常を知り、息子の Sugandha に王位を譲り、森に入ることを決意する。妻の Ummadanti も付いて行くことを願い、二人は Himavanti の森に入り出離波羅蜜 (nekkhammaparami) に精進しようとする。帝釈は、Vissukamma (divine architect) に出家所を作るように命ずる。二人は、瞑想と観想 (bhavana, kammatthana) に専念し、Sujavana は禪定を経て、証智 (abhiñña) に達した。Ummadanti も禪定を得た。二人は出離波羅蜜を行じて、寿命を終えて後、共に兜率天に再生した。世尊は言われる「私の教えを心に止めなさい。そうすれば涅槃に到るであろう。清らかな心を持つ者は輪廻から永遠にとき離れるであろう。Sujavana の教説を初めから終りまで聞く者、人々に声を上げて読み解く者、写して寺院に奉納する者、あるいは花で経本を讃嘆する者は、財に恵まれ、三福 (富裕、昇天、涅槃) を得るであろう。Sujavana の教説は、かつて仏陀をとり囲むサーリプッタと一万の比丘に与えられて、彼らのすべてが、阿羅漢の位に達した」と。

あらずじは以上の通りである。物語の下敷きとして、聖典ジャータカの Vessantara を想起させると共に、東南アジアに広く伝播する Sudhana と Manohara の物語と似た話の展開にも気付くところである。ただ、二人が森に出家する箇所より以降は、仏教の修行に関して、かなり高次の内容になっていることに驚かされる。もちろん単なる骨子のみでは、到底その評判の実態がどこにあるかを窺うことは出来ないが、Peller 氏は、Khoon の一般民話ジャータカに比較して、Sujavaniya は仏教教

理の詳しさにおいて、はるかに豊かであると指摘しておられる。添えられた英語が抄訳であるため、完全に原文の実際に触れることが出来ないことは、現地語の理解がないことも含んで残念なことである。なお、付記するならば、この物語の評判の高さは、Chieng Tung の寺院壁面に Vessantara の隣に続いて壁画として描かれている事実を指摘することが出来る。また人々は、物語の場面を刺繍して数メートルにおよぶ幡を寺院に奉納することを積徳の行としてしているとのことである。人々にとって Vessantara の前生である Sujavaniya は、Vessantara に次いで一番目に仏陀ゴータマに近い菩薩であるとして崇められてきたのであると、Peller 氏は語っている。

○ The White Nighthar (1999) は、Lao の古典文学の一つである。一般の作品が、四、〇〇〇から一〇、〇〇〇偈の韻文で構成されるのに比較して、本作品は短く八七四偈から成り立っている。数において二一九偈の四行連句 (Couplet) および二〇三偈の二行連句 (Couplet) が見られるが、一部は不完全なものがある。また一五〇の偈がペンの滑りか、意図したものか分からないが、写経生の単なるミスとは思えない姿で失われている。しかし、それはテキスト理解に不便を生じてはいないと Peller 氏は述べている。また、本作品のユニークな点は、詩作が新しく一九世紀のものと考えられること、しかも詩作者は現東北タイの不幸な時代 (一九世紀後半シヤムとの抗争) を反映して、生育地で僧侶としての学を続けることが出来ず、やむなく Bangkok

に移住し、ついに故郷に帰ることなく、かつて村の夕べの集いに語られた詩作品を偲びつつ、あたかも自らが語り部であったかのとくに、この *The White Nightjar* を追憶の中で作ったと推定されることである、と Pelletier 氏は解説している。なぜなら、他の Lao 古典文学には決して見られない、詩作者自身の思いやそれがどのような風景の元で語られているかなどが、物語を中断して、しばしば挿入されているからであるという。

物語のあらすじは、王に二人の妃があり、一人に子が授かるが、もう一人の妃の陰謀で、生まれ出てきたのは鳥 (*white nightjar*: 白いヨタカ) であった。異形のもの (実は菩薩であるが) は、母と共に国を追われ、ある国の宮廷園の老守衛夫婦に救われてそこに住むことになる。ある日、その国の王女が庭園に遊び、*white nightjar* を見つけ、可愛さのあまり宮殿の自室に連れて帰る。*white nightjar* は、夜に王子の姿になって王女と愛を語る。そのうちに王女は懐妊し、王宮は大騒ぎとなる。父探しが始まり、*white nightjar* は国王の前に姿を現すが、王のますますの怒りの中、二人は追放される。ときに、隣国から王国は攻められて国が減びようとする。そこに *white nightjar* は普通の姿に戻って、一矢を空に放つて敵を抑えてしまう。王はこの勇敢な戦士がほかならぬ *white nightjar* であることを知って、満足して王位を譲ると言う展開である。この概略では伝える術がないが、*white nightjar* が天界から妃の胎宮に宿るまでの筋道、あるいは陰謀、追放、あるいは寝室での愛の語りは、多分に聞く人々を幻想の世界へ誘い込んだであろうし、また話中への仏

教教理の折り込みにも、当時の仏教受容の姿を豊富に見ることが出来るのである。Lao の特異な作品である。

以上、Pelletier 氏より寄贈を受けた書物についてその概略を述べた。ここで知り得ることは、一四世紀から一六世紀にかけてランナー王国を中心に、(同氏が名付けた) いわゆる民話ジャータカ (*folk jataka*) の類が無数に作られたことである。同氏はその数は数百に及ぶであろうと言っておられる。私たちが研究の対象としている *purnasavitarka* はこれらの豊富な土壌の上に咲いた珠玉の物語集なのかもしれない。ただ注意すべきは、*Sujavanna* の例に見るようにそれのみで十分に独り立ちする物語が、バリー語では流通することなく、それぞれの土地の言葉でその地の人々にはよく知られる一方、域外の人は知ることもなく、地方の寺院の中で独り伝承されている事実である。また、Pelletier 氏が収集された *Khoan* の折本写本群は、民話ジャータカとでも称すべき現地語で綴られた物語が、各地に豊富に残されていることを示唆している。これらを総合して、およそ一四世紀から一六世紀の三〇〇年間、北タイでは、あたかも紀元前にインドで古典ジャータカの花が咲いたように、先学のタイ僧侶たちは、人々への教化に使命感とあふれる情熱をもって、民族にとつて身近に感じられるようさまざまに工夫した創作ジャータカを盛んに作り出し、村の夕べの集いや祭祀の場で頻りに語ったであろうことである。それは長い仏教史の中で第二回日のジャータカ・ブームとも呼べる観を呈したのではないであ

ろうか。民衆の教化と東南アジアの仏教を支えた在家による飽くなき布施の伝統は、この時期に北タイで起ったジャータカ爆発がその底流を形作ったのではないかと思えてくるのであった。

註

- ① *Pāṇṭasajātaka* の起源および年代については、ダムロン王子 (Prince Damrong Rajanubhab) がタイ訳初版本 (1925-) の序文で述べている—これらの物語はランナータイ古代王国の首都であった北タイのチェンマイに住んでいた僧たちによって集められ、整えられ、パリー語で書かれたもので、編纂の時期は一五世紀から一七世紀半ばである—とするものが大方の学者から受け入れられている。
- ② *Apocryphal Birth-Stories (Pāṇṭasa-Jātaka I, II, translated by I. B. Horner and P. S. Jaini, The Pali Text Society, London, 1985, 1986. P. S. Jaini が 'Zimme Pāṇṭasa' と称されるゾルマ版を PTS から校訂出版 (1981) した Pali 本の英訳版)*
- ③ 大谷大学図書館編『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』大谷大学図書館、一九九五。
- ④ 総合的な研究成果として次の報告書がある。①平成一〇年度—平成二二年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B) (2)) 研究成果報告書『大谷大学所蔵パリー語貝葉写本における *pāṇṭasajātaka* の文献的研究』大谷大学文学部、二〇〇一。②平成一三年度—平成一五年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書『大谷大学所蔵貝葉写本 *pāṇṭasajātaka* と他伝承の同名本との比較研究』東方研究会、二〇〇四。
- ⑤ 第一回調査は、二〇〇三年三月二日—二〇日 (詳しくは、田辺和子・清水洋平『パンニャーサジャータカ貝葉写本タイ王室コレクション報告』『パリー学仏教文化学』17, 二〇〇三参照)、第二回調査は、二〇〇四年一月四日—二月四日 (詳しくは、吉元信行・舟橋智哉・清水洋平『タイ貝葉写本調査報告』『大谷大学真宗総合研究
- 所 研究所報』44, 二〇〇四、清水洋平『Wat Hong Ratanaram 寺院所蔵貝葉写本調査報告』*Pāṇṭasajātaka* 貝葉写本集成を中心に—』『パリー学仏教文化学』18, 二〇〇五。参照) に実施した。
- ⑥ この席に、フランス極東学院 (EFEO) 研究員の Jacqueline Filliozat 女史も同席された。
- ⑦ タイと近隣諸国の文化・芸術科学技術を紹介している機関で、出版会社や図書館も併設している。
- ⑧ タイでは、貝葉写本コレクションにおいて、王室版と呼ばれるものや寺院所蔵のもので学界に通用できるカタログ作成はなされないままになっている。三蔵が作成された時は常に、詳細なカタログを用意する習慣があったとは思われないので、種々の王室版や寺院所蔵のものがどんな多くの写本を、どのように保持していたかが知られつつある (Peter Skilling, *Pali Literature Transmitted in Central Siam*, Bangkok, 2002, p. lviii)。そのために、Jacqueline Filliozat 女史が Wat Pho 寺院をはじめとする寺院所蔵の貝葉写本のカatalog作成をしているのである (前掲田辺 [2003, p. 140] 参照)。
- ⑨ チャオプラヤ川の西岸に広がる地域で、現在のチャクラー王朝がバンコクに遷都する以前の一七六七年から一七八二年にかけて、タークシン王により都が置かれていた。
- ⑩ Shingyo Yoshimoto, Editor in Chief, *pāṇṭasajātaka kept in the Orani University Library — Transliteration from Manuscripts in Khmer Script — Pali Manuscripts Research Project Shin Buddhist Comprehensive Research Institute Orani University, 2004.*
- ⑪ 一世紀頃にロプリー周辺からやってきたモン族が興したハリブンチャイ王国の都があった町で、一三世紀後半にランナー・タイ王国に吸収されるまで、北部モン文化の中心として栄えた。
- ⑫ Wat Phrathat Hariphunchai (ワット・プラタート・ハリブンチャイ) / Wat Cham Thewi (Wat Kukul) (ワット・チャーム・ティウイ) (ワット・ククト) など他二ヶ寺。